昭和九年九月一日発行

會報

第五年第八号

通巻第三十八号

INVERNESS-ΟbΔN（續）

Innergarry の古い城を Camera に收めたりしてゐる内に再び閘門に来る。Laggan である。こゝで愈々最後の Loch Lochy に入る事になる。例の如くノロ〳〵と三ッの閘門を通る、閘門の番人の飼犬が何時も肉を貰ふので慣れっこになってゐる汽船の steward を見つけてワン〳〵とセメントの岸から吠えてゐる。悠々とした例の大人が何時の間にか僕の傍に立ってアッハッハと腹の底から笑ってゐる。何が可笑しいのかと思ってゐると「あの犬は賢い奴だ、何時も骨を貰ふ事を覚えてゐる。だが steward は最後の閘門迄それをやらない、まあ見てゐ給へ。今に最後の閘門へ廻って待ってゐるから」と言ふ。"Really?" と聞き返すと "Yes, Yes." と念を入れて答へる。と突然 "Come on, Jack" とか何とか言って威に犬コロと會話を始めた、犬も判ると見えてキャンキャンと答へる。すると此の堂々たる respectable gentleman は如何にも愉快相にアッハッハと笑ってゐる。その内に下のデッキに二人のお婆さんが出て来てこれも犬との會話に参加する。早口に "Come on, Let up!" とか何とか言ひながら如何にも愉快気に打興じてゐる。毛唐は全く無邪気で simple な天真な所がある。この堂々たる鬚の紳士が汽船の上から陸のチンコロを相手に真顔で會話し笑ひこけてゐるのは、僕から見ると犬よりかづっと滑稽に思はれる。その内に最後の閘門に着いて骨が投與へられる "Let up!" と皆が大聲で怒鳴る、やっとチンチンすると又骨が投げられる。堂々たる紳士は自分が simpson のどッテキにでもありついたかの様に心から嬉しさうにアッハッハと笑ってゐる。笑ひ終ってから "very clever thing, isn't he?" と振返った。可笑しくて堪らなかったが我慢して "Yes, very clever." と答へた。

Loch Lochy に入ってからは景色は Rich に於けるそれ程には素晴らしくなくなった。Rich の風景は全く素晴らしかった。Scotland の Scotland たる所以は glampian に於ると同様この Rich

の辺りで楽しまれる。高い淋しい山と山の間に細く長く続いた冷い湖。だが其の湖の畔には乏しい自然の恵を利用して侘びしい生計を営む Scotch の忍従の生活がかぼそい煙を立てゝゐるのだ。低い小さな灰色の石造りの家屋が所々にポツリ〳〵置忘れられた様に散在してゐる。これらの物淋しい住居にも夏は訪れる。納屋からすぐに農がってゐる牧場の柵に沿って茂ってゐる樹々には白い花が咲き誇ってゐる。Buttercup の黄色な花 Daisy の白い花 Ordendrum（石楠花）の赤い色。寥しい荒原の生活にも相應の賤い色彩を與へる事を自然は忘れない。牧場から急にせり上ってゐる若っぽい急傾斜には羊が放浪してゐる。Highland sheep お前は此の高原の Bagabond だ。傾斜のせり上った頂は低く垂れこめた雲に閉されて見へない。時々雨をもたらす此雲の隙間から太陽の光線が斜に洩れて来る。

又、所に依っては静かな湖面に悩んで僅に延びた陸地の端に鬱蒼たる樅の巨木が林をなしてゐる。その茂みの間を透してチラツクのは穏かな村の住居の白壁とオレンヂ色の煉瓦である。だがその一番端には半ば崩れ落ちた荒城の塔が蔦に覆はれたもの淋しい姿を柳の葉の湖面に静かに寫してゐるのである。「中世の昔、武士道華かなりし頃 Clan の名誉を誇る Clan に着飾った若き騎士と、気品高く清楚花の如き佳人との間に咲き出でたであらう恋の繪巻は自ら幻想となって湧き出づるであらう。」と言ふ風に Guide Book なら書かねば納まらぬ所である。

やがて行手に遥か残雪をチラツカせて massive な山が見え出した。例の「堂々悠々」紳士の連れの若いのが来て色々な話をする。American らしい発音だから、さうかと聞くと、「No, I am a Londoner」といやにキツパリと答へやがる。この Londoner に聞いてみると残雪の山が英国第一の高山 Ben Nevis（4406 ft.）だといふ。Ben Nevis が近くなったと思ったら Fort William 行の鉄道に乗換へる Banavie につく。汽車の出る所へ歩いて行く途中、例の如く Bagpipe の音を吹きながら帽子を差出す Scotch の乞食に遭ふ。Bagpipe は割に騒々しいがそれでゐてどことなく哀調を帯びた物である。汽車は十分許りで Fort William へ着く。こゝで又 Oban 行の汽船に乗り換える。大分疲れたので Cabin に入ってウトウトと眠ってしまった。眼が覚めると間もなく Glen Coe へ行く川の口を通って Oban に近付く。瀬戸

内海をも少し荒涼とした様な風景である。何か先刻からシロホンみたいなmusicをやってゐるなと思ってゐたら急に君ケ代をやり出した。之は不思議、Scotchは大層serviceが良いなと感心してゐるとその後は民謡のannie Laughleyか何かをやる。何時の間にか止んでしまったなと思ってゐると帽子を手にして金を集めに来やがった。仕方がないから一ペニー呉れてやる。どういふ訳か僕は支那人と間違へられた事がない。何処か日本的なところがあるのかも知れない。どうして日本人たる事をrecognriseするかと聞いて見ると、眼付が丸くてOrientalな細眼でないからとか、前に日本人を見て知ってゐるからとかハッキリした返事を聞かない。

Oban港に着いてゐると、灰青色の軍艦が沢山錨泊してゐる。艦艇が浮いてゐる。軍港かと思ったがcoaling stationだと判った。Kerraの島を前に控へて深く入り込んだこの港は軍港にはもってこいである。日本と違ひ喧しい事を言はないからCamera や Cine-Kodakをぶら下げて舷橋を渡りノコ〳〵と終の方から降りて行った。Columbia Hotelはpierのすぐ前だ。"Take these two gents. to the room."ことと言ふ訳でボーイに案内される。手を洗ってマゴ〳〵してゐると、晩飯を拵かした為に激しい空腹を感ずる。夕食のドラの音に五分だけ余裕を置いて食堂にのり込むともうあらかた塞ってゐる。Table d'hôte か何かをつゝいてゐるとconductrice 親子が同じTableに案内されて来た。食卓だけは別にしたかったらしいが、外が寒ってゐるので文句も言はず大袈裟な身振りでOh again with you.ことか何とか言って腰を下す。食ひ終えると一緒にsmoking roomへ行かうと言ふ。行ってみると満員で駄目、では散歩しやうと出てみると雨が激しいので親父は止めにしてしまふ。軍艦を見ながら話合ってゐると赤いセルロイドの眼鏡をかけた人相の悪い男がやって来て、あれはBattle Cruiserだとかsub-marinesがそこに見えるとか言って、明日見に行かないかとすゝめる。俺は日本で立派なBattle shipsを見たから敢えて行く事はないと言ふと、Gunduvner はっお前は頸をchopされるのが恐ろしいんだらうとカラ〳〵笑ふ。これは僕等が食事の時「日本ではcoaling stationへ、外人がCameraを提げてやって来れば Policeにうるさくつきまとはれる」と話したものだから冗談に憑

雨は一寸止みさうにもないが、120項の城跡があるし Mckaige Tower の Colosseum もあるので散歩旁々行って見やうと息子の方を誘って三人で出かける。仲々冷い。途中まで行ったが雨が段々ひどくなって来たので引返して Hotel に帰る。Lon-donerは独りで Bar へでも行くのかって又明朝と言ひ乍ら街の方へ歩いて行った。

（関）

廣島便り

神戸から廣島へ来て最早半年になって了った。実際早いものだ。何か書かふと思ひつゝも此の項は訪問客もなく閑暇があり過ぎて何をする気にもなれない。僕といふ人間（？）は何かしらザワ〳〵して居ないと落着けない性分で自分乍ら可笑しくなる事が屢々ある。此の會報にも大部御無沙汰をして了って誠に済まない、そろ〳〵コンちゃんに叱られ相な時分なので豫防の意味で責任だけ塞いで置かふと思ふ。二等でも三等でも同じだが江戸を西に離れる事急行で丁度十九時間、下関へはたった六時間といふ離れ小島とでも云ひ度い所が當廣島である。廣島といふのは読んで字の如く廣い島の様な所で山陰の国境から流れて来る太田川が瀬戸内海に注ぐといふ所で三角洲を形成してゐる其の上に発展してゐる訳だ。従って川が七本も殆ど縦に流れてゐる。

気候は想像してゐたよりも決して良くはなく瀬戸内海的な処は余りないと思ふ。雨も多く風も余りない。冬も可なり寒い、思ふに神戸の方が気候から云へば恵まれてゐるだろう、山は比較的ない、それらしい所は山陰境の方まで行かねばならないので時間の余裕のない人間には駄目だ、附近と云ったら松茸山許りでお話にならぬ、廣島の山岳家は恁んな所を歩るくにもピッケル御持参だ、何と云っても田舎だなと思ふ。フラウが一寸洋装でも仕様ものなら町の兄ちゃん連中は何とかいってはからかって行く、恁んなのが東京へでも出て見たら騰をつぶして気絶するだろう。何しろ防空演習にハシヤギ過って善んでゐるのは恁んな連中なのだから。防空演習だか婦女誘かい演習だか解らない。東京や大阪神戸と異って田吾作許りだから嫌になる。高等学校の生徒なんかまるで乞食見たいな風をして狭い町をうろついてゐる。井戸の蛙だ。女の洋装と来たら御面相も考へずに移民そっくりの風体だ。モダンボーイも居る。之が又カッエーの客引き見たいな連中許りだ。ポリ公が又大きな

ツカラをして「人民共」と云った風にしてガチヤ〳〵歩き廻る。

然し海といふ点になると一寸東京や関西には比較出来ぬ位い。嚴島もいゝ。あの島の最高点弥山へ五百米突位と思ふ）から眺め廻した瀬戸内海の風景は東京ぢや勿論見られぬし松島なんか問題でない。二、三日前に此の島の真下にある絵ノ島へ行った。宇品から〝ポン〳〵〟で丁度海上一時間、途中弁天島といふ可愛らしい小島を過ぎる辺り実際いゝなと思った。唯雪真にとれぬ事だけが残念だ。宇品が既に要塞地帯だから怎うにもならぬ。宮島は山稜線が境となってゐる。然ってあの島居のある西側から本土の方を撮す事は許されてゐるが本土の方から宮島を撮す事は出来ない。聞く処によると此の辺の島々は殆ど火薬庫になってゐるらしい。

兎に角広島から宮島を除いて了ったら后には何も残らないと云っていゝと思ふ。見物に来るのだったら其の積りでないとがッカリするに違ひない。

此の頃は先にも云った様に訪問客がない、殊に山岳部の同僚が居ないといふ一番情ない事情にあるので専らラジオとレコードに鬱を晴らしてゐる訳だ。九郎ちやんとトンちやんの家にあるのは七八球のスーパーだが小生の家にあるのは六球のスーパーへテロダインだ。廣島でもうち一軒だけだろうと思ふ。58 247 58 287 345 280と云へば殆んど最新球許りなんだから。280といふ整流球は今では余り感心しないがへ電圧の変動率が比較的高い）丈でも當分は間に合ふので我慢をして置かふと思ふ。マニラなんか悠々と這入るが此の頃は空電が多くて不愉快だ。然し287といふ複二極五極管を使ってゐるので大阪や東京辺りを聞いてゐてもフェーディングは殆どない様になった。実際頭のいゝ奴が世の中には居るものだと感心する。三田無線の茨木さんの話によると十極位の球が今独逸にあるといふから今に一球のスーパーへテロダインなんていふのも出来て来るに違ひない。さうなればラジオのセットも簡単になり値段も安く消費電力も少くて済む様になるからまだスーパーを御持参になってゐない人は今少しの辛棒だから待っ方が賢明なやり方だと思ふ。

レコードの方はまだ何もわからないので云々する資格がないからもっと研究してから論文でも発表しやうと思ふ。

北海道の興野氏よ、大変御無沙汰をして了った。

小生の近情右の通りだから宜敷、日頃の御詫びの積りで怎んな長々と書いた。怎うか御勘弗願ひます。来る秋十月の終りか十一月のはじめには小生もいよ〳〵三人の子供の親となるらしい。全く呆れ返り申候だ。

最後にバンちやんとかいふ森脇君が訪ねて来て呉れた、東大谷へ這入るとか云って居たが成功したぐろうか、天候が悪くなったので心配してゐる。

九、七、二二、　廣島市中廣町八七一にて　（熊）

投稿家列傳

第五号で近チヤンが投稿回数の棚卸をやったから此号では其筆格（？）の品評會をやらう。

○　村尾金二氏

針葉樹會員中文章家多しと雖も氏の右に出づる者は絶対にない。それは東郷元帥が不世出の名將であることに一点疑ふ餘地が無いと同程度に信じても決して過ではない。行文流麗、紀行、隨筆、漫文、その何れも行くとして佳ならざる無き稀代の名文である。魚沼三山紀行は私の愛誦措かざる大文章である。

○　近藤恒雄氏

氏も村尾氏に匹敵する文章家である。前者を東郷元帥とすれば之は加藤参謀長である。「投稿して会員を喜ばすし」といふ念願が文章の隅々に溢れてゐる。澱みのない、理路の透明な、しかも常にウイットをユーモアを忘れぬ筆致は讀者に深い感銘を與えずにはおかない。燦として輝く明星的存在である。

○　吉澤一郎氏

何といふ思ひ切った言方をする文章だらう。飾り気もなく誇張もない。思ふまゝを大膽に率直に淡々と書いて居るのだが不思議に引きつけられる。川柳に「下女の文あたかも話するごとく」といふのがあるが、あたかも話するごとく書くといふことはわけもないやうで実は容易の技ではない。が氏の書いたものを読んでゐるといつも氏と話してゐるやうな気がする。氏も亦飾らざる文章家である。

○　松本謙三氏

「……云って居った」といふやうな長岡弁を時時交えた文章を書く。平易だが克明で毅然とした書き振りである。軟かいものにかけては村尾、近藤両氏に及ばぬ。が自然描寫は者ちが者ちまあって却々うまい。滋味のある文章家である。

○矢作太郎氏

會員の山行記録兎角不振の昨今、独り遠近の山歩きの記録を、美はしき自然描寫に織りなして會報に寄せられる熱心と努力には敬服の外はない。単独行を主とするためか、前記三君の夫のやうに人との交渉を描いた文章は尠いが、それ丈自然の美しさの再現には優れた筆致が窺はれる。「小楢山と長城山」の稿中黒平峠を流川谷に降る條は讀者を何時の間にか新緑の天地に引入れてしまう。氏の健脚と精進を祈って止まない。

○渡辺九郎氏

センチメンタリズムに近い感触を受ける程氏の文章は纖細である。彩管に優れた技を示す丈あって丸眼の及び難い鋭い、精致な觀察と描寫とが目立つ。最近誌上に消息を絶ってゐるのは数少い関西勢にあって特に淋しさを感じる。六甲の自然は氏に秩父の様な感銘と法悦とを與へないのだらうか。

（浩一郎）

動物の話

「動物と暮して四十年」といふ本を讀んで居ると諸君の色々面白い話が書いてあるので時々独りでくすくす笑ってゐたが書抜いて御披露に及ぶ。唯蟲類のないのを遺憾とする。先づ南の方から始める。

熊

熊は毛唐には珍しい動物ださうで外国の興業師が来ると獅子や虎と交換して帰るさうでこの点なかなか捨て難い。併し行儀が悪い。獅子などは寝って居っても人の通るのがわかるさうだが熊は一寸も知らないさうで夏など何処でも関はず仰向けにひっくりかへって大鼾をかいてゐる。又一面可愛い処のあるもので人が近寄ると後足で立って食物をくれと言はぬばかりに頭を上下に振るさうだ。面白いことには好物は飴粕の腐りかけて少し酢っぱくなったやつださうだ。

狐

狐は北半球の大部分に住み性質怜悧且狡猾特徴は吻長く毛長く且密生し瞳孔が晝間細くなるとある。北国の黒狐、十字狐の毛皮最も高價なり。動物の中では最も朝寝坊だ。古来狐は化かすと云ふが絶体にそんなことはないさうだ。

駝鳥

羽は飛ぶ用をなさぬかはりに凄晴しく走るのが早い。馬などとても及ぶべくもあらず、汽車と良い勝負ださうだ。面白いことには雌が一個〳〵別

な処に卵を生んで行くと後から雛が順々に孵めて行くさうだ。かゝあ天下かな？、その武器は脚を前方に向って蹴上げることでなかなかの力を持ってゐるさうだ。

ペンギン

なかなか種類が多く十六七種と言はれてゐる。大きいのは身の丈三尺、体重十貫以上もあるさうだ。さしづめ誰かなどはこの点王様だ。翼は飛ぶ為に使はないで手持無沙汰に歩く時によちよち調子をとるのです。

狸

こいつなかなか憎病の奴で人が食物を持って入って行くと逃げて頭が天井に届く程上るがさて降りる時になると登った分を逆用して降ることを知らぬ為どんな高い処からもぽっんと落ちて魂魄を演ずる。唯感心なことは狸の溜糞と云って大便は一所に定めてうづ高く積みあげてゐるさうだ。

（三角）

トルストイの山

翌日朝早く馬車の中の冷たさに眼が醒めてオリエーニンは何気なく右の方を見た。朝は全く澄み渡ってゐた。と、急に彼は一寸見たところ水歩ばかり距ったと思はれる所に真白な山の集合を見た。その山々は遥か遠い空にやさしい輪廓と夢幻的な頂とをくっきりと見せてゐた。自分と山との距離や山と空との距離や山の壮厳さなどを判然とわきまへた時には、そして其の美の限りなさを知った時には彼はそれを夢ではなからうかと怪んだ。彼は自分を曜ますように体を揺すぶって見た。然し山々は矢張り同じだった。

「あれは何だね、何だね」と彼は馭者に聞いた。

「山でさあ」とノガイ人は無雑作に答へた。三頭立の馬が平坦な道を走って行くにつれて山がその薔薇色の頂を朝日に輝し乍ら地平線に沿ふて走ってゐる様に見えた。初めは山は只彼を驚かせた、次には彼を喜ばせたのだった。が遂には、曠野の真中から突立って居る雪白の峰々が大きくなったり退ひて行ったりするのを見てゐる内に、彼は真にその美の精神に透徹する事が出来る様になった。そして山を感ずる様になった。

その瞬間から、彼の見たもの、考へたもの、感じたものゝ凡ては彼にとっては山の新らしいそして驚くべき壮厳さの性質を帯びる様になってしまった。

（トルストイの「カザック」より）